

P-036

**子どもを対象とした模擬保育の実践による学生の学びに関する研究
1—運動遊びの模擬保育を実践した学生へのアンケート調査の分析から—**

鳥海 弘子、西村 実穂

東京未来大学 こども心理学部

はじめに：模擬保育とは、保育士養成課程の学生が、保育計画立案や子どもへの援助について学ぶために保育実践の一場面を模擬的に実践することである。学生が指導案を作成し、子ども役・保育者役・観察者役に分かれて保育を実践した後、観察者からの評価を受けて振り返りを行う流れが一般的である。多くの保育者養成課程において模擬保育が行われているが、学生が子ども役を演じる難しさがあり（久富・須藤,2022）、実際に子どもを対象として模擬保育を行うことが望ましいという指摘もある。しかし、子どもを対象とした模擬保育の機会は少なく、その効果の検証には模擬保育実践事例の蓄積が必要である。そこで本研究では、子どもを対象として運動遊びの模擬保育を行い、模擬保育について評価を行うことにより、学生がどのような学びを得ているのかを明らかにしたい。方法：4年制保育者養成校に在籍する健康指導法の受講学生156名を対象とした。学生を3~6名のグループに分け、保育所の2~5歳児クラスにおいて運動遊びをテーマとした模擬保育を行う。模擬保育の前に子どもの様子の見学、保育計画立案、模擬保育準備を行い、模擬保育実践後にどのような学びが得られたのかを尋ねる質問紙調査を2024年7月に実施した。調査項目は、模擬保育をした子どもの年齢、これまでの実習経験、事前準備・実践・子どもへの関わり・臨機応変な対応・環境構成・模擬保育全体についての評価であった。結果：129名の学生からの回答を得た（回収率82.7%）。模擬保育の評価について、非常にあてはまる5点、全くあてはまらない1点として5件法で尋ね、平均値を算出した。「模擬保育実践に必要な準備物を揃えられていた」4.43（SD=0.80）という準備に関する数値が高かった一方で、「対象となる子どもの反応を予測できた」3.67（1.02）、「活動に参加しない子どもに対応できた」3.75（1.08）の平均値は低く、子どもの反応の予測が困難であった様子がうかがえた。また、模擬保育全体の評価として最も平均値が高かったのが「子どもの反応の面白さに気づくことができた」4.63（0.59）であり、「保育の振り返りの重要性に気づくことができた」4.56（0.57）が次いだ。子どもに対する模擬保育の実践により、学生は子どもたちの予想外の反応に十分に対応ができなかったものの、子どもの反応の面白さに気づくことができ、自身の保育実践への省察の重要性を実感できたと考えられる。

P-037

**子どもを対象とした模擬保育の実践による学生の学びに関する研究
2—運動遊びの模擬保育を実践した学生の自由記述の分析から—**

西村 実穂、鳥海 弘子

東京未来大学 こども心理学部

【はじめに】「子どもを対象とした模擬保育の実践による学生の学びに関する研究1」では、子どもを対象とした運動遊びの模擬保育を行った学生が得た学びを定量的に把握することを目的とした質問紙調査を行った。その結果、子どもたちの予想外の反応に十分に対応ができなかったと感じていた学生が多かった。本稿では、学生がどのような子どもの反応を予想外と感じたのか、模擬保育の実践を通じて得た学びはどのようなものだったのかを体的に把握することを目的として行った質問紙調査の結果を報告する。【方法】「子どもを対象とした模擬保育の実践による学生の学びに関する研究1」と同様の対象者156名に対して、質問紙調査を実施した。調査期間は2024年7月、調査項目は模擬保育の実践の中で予想と異なった子どもの姿、模擬保育時に配慮すべきと感じた点、模擬保育を実践して得た気づきの3点であり、それぞれについて自由に記述してもらった。【結果と考察】141名の学生からの回答を得た（回収率90.4%）。質問項目への回答を共通する内容ごとに分類した。模擬保育の実践の中で予想と異なった子どもの姿としては、「想定外の遊び方」（28%、40件）、「ルールの遵守や約束の理解」（28%、39件）が多く挙げられた。ルールの遵守や約束の理解については、子どもたちが運動遊びのルールを思った以上に理解してくれたと記述した者がいる一方で、ルールが伝わらないと記述した者もあり、学生によって子どもの理解力についての認識が大きく異なると考えられた。また、「活動に対して消極的な反応をする子どもの存在」（14%、20件）が予想外であったとした学生が複数おり、活動への参加の仕方が様々であると想定できていなかったことがわかる。模擬保育を実践して得た気づきについては「計画・実践の改善点に関する気づき」（61件、43%）、「保育の技術に関する気づき」（36%、51件）の順に多かった。保育の技術については、子どもへの言葉かけの仕方やトラブルへの対処に関する内容が多く挙げられた。模擬保育時に配慮すべきと感じた点について尋ねたところ、「個への配慮」（35%、49件）、「物的な環境構成」（32%、45件）、「子どもへの伝え方」（29%、41件）があった。学生が実施した活動が運動遊びであったため、身体を動かしたときにケガや子ども同士の衝突が起こらないようにする環境構成や子どもに安全を意識させるの関わり必要性を強く実感したと考えられる。